

東京都が設置した「患者の声相談窓口」には年間約1万件の相談が届くが、うち1割が医療行為や医師とのコミュニケーションを巡る苦情だという。ドクターハラズメント、通称「ドクハラ」が叫ばれて久しい昨今、その犠牲ともいえる事件が鹿児島県の精神科クリニックで起きていた。薬の過剰投与と一言で女性患者の心身をもてあそんだ医師は、複数の自殺者を出してなお、今日も平然と言葉を続けている。クリニックで打われていた悪夢の診療を、被害者遺族が本誌だけに語ってくれた――

カーテンで区切られた診療室の中で、1人の男性医師がうつむきながら話している。「確かに、関係があったのはその通りです」
――性交渉があったと。
――回数は2回です」
――回数の問題じゃないんです。あなたのやったことは医療行為といえますか？
――患者と主治医の関係を完全に逸脱していました。彼女への好意を抑えられなかった。ただ、患者とそういう関係になったのは彼女だけです」
――恋愛感情があったと。
――はい。でも、性の道具に使ったような、そんなつもりはないです。申し訳ないことをしてしまいました……」
がっかりとくだれる男性

を問い詰めているのは、この医師との関係の後、自ら命を絶った女性患者の遺族である。
6月8日、九州厚生局麻薬取締部が鹿児島県内に住む精神科医X氏（44才）の自宅と、彼が経営する2診療所（鹿児島市と垂水市）を家宅捜索した。X氏には、無診察の患者に営利目的で向精神薬を処方した疑いが持たれていた。（ずさんな診療体制が常態化していた）
（同取締部が精神科医に対し強制捜査に踏み切るのはほとんど例がない）
鹿児島を代表する地方紙・南日本新聞をはじめ、全国紙でも報じられたこの一件には、深い関心がもたれていた。
「問題は薬の処方だけじゃなく、問題は薬の処方だけじゃなく

精神科医異例の捜査
同業者、あり得ず
女性患者に性的言動
10人超、診療所内
精神科医調査 鹿児島に要望

「2診療所を家宅捜索
鹿児島市の医師聴取
麻薬取締部の捜査員がX氏に
問答集でも作られた

鹿児島を代表する地方紙・南日本新聞をはじめ、全国紙でも報じられたこの一件には、深い関心がもたれていた。
「問題は薬の処方だけじゃなく、問題は薬の処方だけじゃなく」
初めから彼の態度には疑問を感じた。一通り、彼の現状を説明したところ、このままだとどうせ仕事に行けなくなるよ、とうすら笑いを浮かべていた。処方箋に関しては、薬を出しておきますね、のひと言で終わりでして、
――適応障害と診断され、向精神薬と睡眠薬を処方された綾子さんが、1週間後の定期診察で薬の量が急増する。
――2種類だったのが4種類になり、より強い向精神薬が処方されました。初診時以降、精神的に不安定になる頻



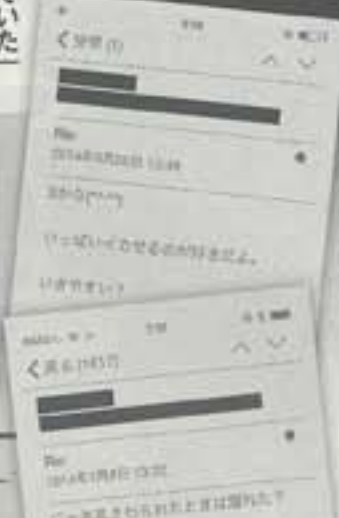
医療ジャーナリスト 伊藤隼也が取材班と

鹿児島発

セクハラ医師

被害者遺族 怒りの告白
極めて強い睡眠薬である。そもそも向精神薬には副作用が付きもので、薬によって「アタチベーション・シンドROME」（自殺企図や他人への攻撃性などの異常行動）」が引き起こされることは、製薬会社も認めている。
事実、向精神薬の一つ「バキシル」の添付文書には、「使用上の注意 慎重投与（次の患者には慎重に投与すること）」として、次の文章が

明記されている。
（躁うつ病患者 躁転、自殺企図があらわれることがある。）
体の震えが止まらず、錯乱状態に陥ることも多々あったという綾子さんは、症状の改善が見られることもないまま、12月6日午前6時、自宅のトイレのドアノブにストールをかけて自殺した。
悲しみに暮れる岡田さんに追い打ちをかけたのが、死後判明したX氏と綾子さんの関係だった。
「娘のスマホを開いてみると、X氏とのメールのやりとりが



鬼畜の診察室

麻薬取締部が捜査!

その後、自ら命を絶った患者も 過剰な薬を投与して肉体関係。



セクハラ医師X氏の罪状を列挙する被害者遺族の岡田さん（上）はX氏から強いられた性交渉

度が増えていたのですが、X氏に伝えても、それは治療が進んでいることなので安心して下さい、と繰り返すのみでした」（岡田さん）
以来、綾子さんの心身は不調を極め、仕事にも行けなくなってしまいました。
診察を重ねることに処方される薬が増え、彼女の症状は悪化の一途をたどった。
14年4月にはリストカットが始まり、日常生活もままならなくなると、この時、X氏は「生活保護を受けなければ」と意に介さなかったという。
7月には処方される薬が10種になっていました。とても強い薬が多く、服用して一時的に症状がよくなり、薬の効果が切れては沈み込む、ということを繰り返す状態でした」（岡田さん）
処方された薬の1つが「ベグタミン」だ。不整脈や悪性症状などの重篤な副作用から16年9月に製造が中止された

クリニックの従業員も自殺していた

冒頭のやりとりは、綾子さんの死から1か月あまり、四十九日を控えた岡田さんが、家族と共に病院を訪れた時のものである。
「X氏は、何を言っても下を向いて黙っているばかりで……でも、最終的には娘との関係をすべて認めました。治療には全力を尽くしていたと主張し、患者と関係を結んだのは彼女が初めてだった」と言っていました」（岡田さん）
だが、彼の言葉はすべて嘘だった。
本誌が取材を進めると、他にも多数の女性患者が、同様の被害にあっていたことが判明したのだ。

以下、患者たちの声を紹介する。
「日々の症状を把握したいから、とLINEを交換してからは、毎日200通近いメッセージが届くようになりまし。僕を男として見れますか？とか、男女関係を求めてくるものばかりでした。一度関係を断ったからには、君だけを愛している」というLINEが毎日のように来ました。他の女性にも同じことをしているなんて、まったく知らなかった」



精神科医のわいせつ事件が多発している。
(写真はイメージ)

「処方薬が大量で、依存症気味になり、精神的にもより不安定になっていきました。その過程で、半ば無理矢理肉体的関係を持たされてしまつて……。以降は、こういう下着を着ろ」とか、「パイプを入れたまま診察室に來い」とか、変態的な要求ばかりになりました」

「診察中に体を触られることは日常茶飯事。X氏は通院でアダルトグッズをたくさん購入して、往診の際には手錠やパイプなどで埋め尽くされていました」

みなX氏との肉体的関係を認めたと上で、おぞましい手口を明かしてくれた。

また、X氏が手を出した女性には患者だけではなく、クリニクの元従業員であるCさんがいます。

「従業員の中にもX氏の毒牙にかかったかたはいます。昨年8月、あのクリニクで精神保健福祉士として働いていた女性が自殺しているんです。

彼女とX氏の間は院内でも公然の秘密で、最後は精神的に病んでしまい、X氏から薬を処方されている状況でした。あまりに痛ましい事件だったにもかかわらず、当のX氏は「バカだなあ。つて言うだけ普通に営業を続けていました」

Cさんによれば、クリニクの業務体系にも問題が多数あったという。

「毎朝病院に來ると、その日診察予定の患者名簿を確認するので、男性患者の欄は全員バツ印を入れて、診察せず薬を処方するだけなんです。X氏自身も向精神薬を服用しており、診察を放棄してベッドで眠りこけることもしょっちゅう。

薬物依存にして患者の正常

「パイプパイプ」の「パイプパイプ」

X氏を拒めなかった理由について、被害女性たちは「主治医に見放されたくなかった」と訴える。

元来、精神科医と患者の結びつきは、他の医療分野に比べて強い。「心」を診てもらう以上、患者は自身の症状から身の上話まですべてさらけ出す必要があるからだ。

医師は患者の告白を基に原因を探り、二人三脚で根治を目指す。双方の全面的な信頼があつてこ

な判断を奪おうとしていたのか、過剰な薬の処方も日常で体調がより悪化していく患者も多かった。カルテに書かれる病名がどんどん増えて行くんです。この診療所は危ない、というのは従業員の間で、1年で20人以上が辞めていく異常事態が続いていました」(Cさん)

本誌が入手したある女性患者のカルテにも、うつ病、不眠症、慢性胃炎、円形脱毛症、虚血性心疾患、肝機能障害とさまざまな病名が書かれていた。

この患者に話を聞くと、「最初はうつ気味だから診察を受けたのですが病状はよくなるどころか悪化するばかり。それに伴い、処方される薬の量も増えていく一方でした」と証言してくれた。

そ成り立つ診療といえる。だが、現実はその距離感を利用したわいせつ事件が後を絶たない。

昨年9月、長野県長野市の病院に勤める精神科医が、10代の女性患者の体を触るなどわいせつ行為を繰り返したとして逮捕された。

同様の事件は過去に幾度となく起きており、07年には大阪府と愛知県で有名精神科クリニックの院長が患者へのわいせつ行為で相次いで逮捕され、話題を呼んだ。

人の心を扱うという仕事柄「患者のちよつとしたマインドコントロールなら簡単」と豪語する医師さえいる。

要質な精神科医を生む最大の要因は、「患者を作れる可能性」にある。

内科や外科と違い、精神科の診療には血液検査もレントゲンもMRIもない。

ストレスでつらい、心がモヤモヤするといった人が来院した際、「うつ病」と診断するだけで、その人は精神病患者となる。

しかし前述の通り、向精神薬には自傷他害等の副作用があり、治療効果に関してもエビデンスが充分でない。実際、12年に日本うつ病学会が「軽度のうつ病には薬を優先しない」という新ガイドラインを発表している。

鹿児島市の事例は、この精神科医療の病巣が顕著に表れたケースである。

岡田さんは現在、「精神科医の立場を悪用した不適切な行為で症状が悪化した」として、他の被害女性らと共にX氏に対して損害賠償請求を求め、提訴を検討している。

元患者の相談を受ける早川雅子弁護士が語る。「少なくとも12名の女性が同様の被害を受けていることを把握しており、県警にも相談しています。不安定な患者の弱みにつけ込むような行為で、医師の責任は重大です」



X氏が女性患者に強要した下着パイプを盗んで購入していたという。

厚生局の麻薬取締部は、自宅捜索時の押収物を基に捜査を進めているが、現時点でX氏はなんの処罰も受けておらず、クリニクも営業を続けている。

7月下旬の昼下がりに、本誌は自宅から出てきたX氏を直撃した。

「無診察での薬の処方と、複数の女性へのセクハラ行為についてお話をうかがいたい」「あの、いや、あの……」

被害者女性の中には自殺したかたもいます。「いやあ……」

「その意識はないのですか。そこまで問いかけると、無言のまま足早に自宅へと戻って行った。X氏の弁護士に取材を申し込むと、

「本人が、取材には応じられない」とコメントした。新たな被害者が出ないことを祈るばかりである。